ヴィクトル・ユーゴーの「悪」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 誠一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7544

ヴィクトル．ユゴーの「悪」について

LE＜MAL＞DE VICTOR HUGO

文学研究科　仏文学専攻２年

渡　辺　誠　一

WATANABE Seiichi

現存する人類最古の文学に於て，善と悪の根源に関し，『アヴェスター』ほど真面に，また明確に区別して語られた作品は他に類を見ないであろう。それによると，善と悪の「両者は，心意と言語と行為において，より正善なるものと邪悪なもの(1)」とであり，眠っているあいだ，両者はともに「双生児」のようであった。ところが，その後，この両者は対立関係に陥り，善霊は悪霊にむかって，「一致しないといえば，われら両者の思想がそうでなく，言説がそうでなく，意志がそうでなく，信条選択もそうでなければことばもそうでなく，行為もそうでなければ．．．．魂も一致してはいないのだ(2)」と語るようになる。ここで始めて事実上の善悪の区別が生じ，善と悪との闘争が始まるのである。

「知恵の神」と呼ばれる最高神，アフラ．マズダーは，自分の周囲を善霊で固め，それらを悪霊と戦わせ，最後には悪を征服するが，もともと善も悪も，根源的には同一なる母胎から「双生児」として生まれ出たものであるから，神の戦っている当の相手，つまり悪は，あきらかに神自身のうちに含まれていた霊であり，神によってその体内から外に押し出され，悪の原理として存在するようになったものである。それは，神が悪を克服することができるように，克服すべき当の悪をまずみずから体外に放出したのだと言うことができる。神は自分から追い出した悪の分身とみずから戦うのである。

これが，ゾロアストラの語る善悪の起源であるが，ヴィクトル．ユゴーの場合，善悪の区別は天地創造とともに始まる。

無限の「自我」であり，完全な存在である神は，なぜこの地上を有限で不完全なものにつくったのか。その理由は簡単である。無限で完全なものは神以外にないのだから，もし神が無限で完全なものを創造したなら，それは神となり，この地上も神と少しも異るところがなくなり，地上は，もはや地上でなくなってしまうからである。

「創造力は，完全で，不死で，けっして衰えない存在を創造することはできなかった。どんな場合にも自分と等しい力を創造することはできなかったから(3)。」これはアレクサンドル．ウェイルの悪に関する基礎的思考であるが，彼は，神秘学や降神術や，特にカバラ教の教義をユゴーに教え，ユゴーの哲学的思考に深い影響を与えているので，ユゴーの「悪」を論ずる場合には無視することのできない存在である。

ユゴーは，ウエイルの上記の文章から次のような美しい詩句を産み出している。

Dieu n'a créé que l'être impondérable.
Il le fit radieux, beau, candide, adorable,
Mais imparfait; sans quoi, sur la même hauteut,
La créature étant égale au créateur,
Cette perfection, dans l'infini perdue
Se serait avec Dieu mêlée et confondue,
Et la création, à force de clarté,
En lui serait rentrée et n'aurait pas été.
La création sainte où rêve le prophète,
Pour être, Ô profondeur! devait être imparfaite.(4)

（大意。神は重さを持たないものきり創造しなかった。彼はそれを輝かしく，美しく，清らかに，神々しいものとした。だが不完全に。そうでなければ，被造物は創造者と同じ高さ，同じ類となり，その完全さは無限のなかに没し，神と混り，神と溶け合ったであろう。その創造は，明るすぎて神に帰り，存在しなくなったろう。予言者が夢想する聖なる創造は，存在するために，おゝ，何という深奥さ！ 不完全でなければならなかった。）

神は自分の霊魂の一部を切り離し，それを被造物に与えて，被造物の原動力となした。つまり自分の分身を送り込んで，被造物を神的なものにしたのである。だが，それは「不完全に」という条件つきであつた。

神が被造物を産み出したその瞬間は，すべて崇高な光に包まれ，すべて静穏，善良，真実，至純から成る強烈な光で充満していた。

Des avalanches d'or s'écroulaient dans l'azur;
Le jour en flamme, au fond de la terre ravie,
Embrasait les lointains splendides de la vie;(5)

（大意。黄金(きん)の雪崩は蒼空で崩れていた。恍惚とした大地の奥底では，日光(ひかり)が炎となって，生命(いのち)の燦々と輝く遠方を真赤に染めていた。）

La nuit se dissolvait dans les enormes cieux

Où rien ne tremble, où rien ne pleure, où rien ne souffre, (6)

（大意。　夜は巨大な空に溶け込んでいた。そこでは，怯えるものもなく，涙するものもなく，苦しむものとてない。）

爪や牙に捉えられて血を流すものもなく，幸せな獣は無邪気な彷徨者だった。悪はまだ存在せず，蛇や鷲や豹は如何なる神秘も授けられていなかった。だが，この至福の状態が長く続く筈がなかった。なんとなれば，被造物は不完全なのだから。この歓喜にみちた楽園は，被造物が不完全であるが故に，苦しみの世界と化してしまうのである。つまり，神の創ったこの不完全さが，まさに物質を産み出す原因となり，悪の発生する根源となったのである。物質が重さを持つのは当然であった。

Or, la première faute
Fut le premier poids.
Dieu sentit une douleur.
Le poids prit une forme, et, comme l'oiseleur
Fuit emportant l'oiseau qui frissonne et qui lutte,
Il tomba, trainant l'ange éperdu dans sa chute.
Le mal était fait. Puis, tout alla s'aggravant; (7)

（大意。　さて，最初の過ちは，最初の重さであった。神は苦痛を感じた。重さは形をとった。そして捕鳥者が震え羽撃く小鳥を引っ掴み，逃れ去るように，被造者は恐れ戦く天使を墜落の道連れにして，落下した。悪が生み出された。やがて，すべてが重さを持つようになった。）

かくて被造物のなかに悪が生じた。これは，被造物すべてのなかに神の分身である霊と，悪である物質とが，つまり，善と悪とが含まれるようになったことを意味する。これは，一見ゾロアストラの「双生児」的な善悪を思わせる原理であるが，カバラ教の教義に基づいたものである。

ウエイルは，人間の創造に関し，次のように語っている。「聖書によれば，神は光や空や大地を創るに際して誰にも相談しなかったが，彼の傑作である男と女を創造するに際して，神は自分以外のものと協議をし，誰かに相談した(8)」と。確かに聖書では，≪ Faisons l'homme à notre image ≫と複数形が使われている。これは，神が誰か他の者と相談した証拠である，とウエイルは考えたのである。『ゾアール』の見地よりすれば，ウエイルの言う通りである。カバラ教典では，神は人間を創る前に，彼の妻であり，娘であるマトロナに相談したのである。彼女は邪な世界に住み，邪悪な悪霊を生み出す存在とされている。その教典によると，神は人間を創りたくなかったのであるが，マトロナの意見と勧告があ

ったために人間の創造に踏み切ったというのである。また，人間が，神だけの意志によって創られた動物達に較べて，特に悪くなったのは，創造にマトロナが加わったためであるとしている。

こういった考え方は，ヴィクトル．ユゴーの心を一時は動かしたものの，ユゴーの根本思想を変えるまでには至らなかったようである。聖書の複数形に関するユゴーの思考は，大体次のようなものであった。つまり，無限な力の持主である神は，土のちりで人を形造り，そこに魂を吹き込んだ訳であるが，その魂は人間のために特別に創られたり，設けられたりしたものではなく，神の魂そのものであった。つまり，別個に孤立した魂ではなく，神の一部であった訳だが，この魂は人間のなかに入って神の行動的な面を発揮する原動力であるから，神は当然この行動的な部分を含んでいた筈だと考えたのである。換言すれば，無限なる神と，それに含まれた行動的な霊とが存在していたと考えたのである。

聖書に使用されたこの複数形は，現代の神学者や哲学者のあいだでも様々な解釈を生み出している。ある者は，ユダヤ人の原始的信仰が多神教であった名残りを示すと説き，ある者は，複数形を使うことによって，神の卓越性を示そうとした尊称であると説き，またある者は，神の持つ力を表わしているのだと説いている。この最後の者と似た考え方をしているのは聖書註解者であるが，彼は，この複数形を，神とその内的充満性とを示すものであると説き，「教父たちは，ここで聖三位一体の第一の暗示をみた(9)」と解説している。この考え方は，根本的にはユゴーのそれと同じだということができよう。だが，被造物そのものに関するユゴーの思想は，キリスト教的なものではなく，カバラ教の教典そのものである。

すべての被造物が神的な面と物質的な面とを含むようになったことは既に触れたが，これは逆説的に言えば，この世の全存在物は神の実体である善と，不完全から生じた物質である悪とで構成されていることになる。極端な言い方をすれば，至善なる存在も悪の要素を，極悪なる存在も善の要素を宿している訳である。どんな極悪な人間にも，悪魔にさえも善良な面があるのだ。これを証明するものとして，スルタン．ムーラッドを挙げてみよう。彼は，ローマ皇帝ネロを遙かに上回る残虐を極めたトルコ皇帝であるが，ある日，「家の入口から少し離れた所に，豚が一匹悪臭を発して，大地に横たわっているのを」目撃した。

.....9 u'un boucher
Venait de saigner vif avant de l'écorcher;
Cette bête râlait devant cette masure;
Son cou s'ouvrait, béant d'une affreuse blessure;
Le soleil de midi brûlait l'agonisant;
Dans la plaie implacable et somble, dont le sang
Faisait un lac fumant à la porte du bouge,
Chacun de see rayons entrait comme un fer rouge;(10)

（大意。　屠殺者が，皮を剝ぐ前に，生きたまま血を採ったばかりである。この動物は喘いでいる。あばら屋の前で。その首は，ぽっかりと大きく口を開けている，ぞっとする恐ろしい刺し傷を。真昼の太陽は，じりじりと焦している。この頻死の動物を。その光線の一つ一つは，真っ赤な鉄棒のようになって，射し込んでいる，どうにもならない黒ずんだその傷口に。そこからは，血が流れ出て，陋屋の入口に，湯気の立つ湖（うみ）を作っている。）

蠅が群がり，傷口の血を吸い，肉を喰っている。ムーラッドは，いきなりその動物に近づくと，道端の木蔭にそれを移し，群がる蠅を追いやったのである。この珍事は，まさに悪人のなかにも善的要素があることをはっきりと示したものだ，とユゴーは言うのである。

従って，地上の善悪は，各自に宿っている善悪の大きさ，重さによるもので，善より悪の勝っている存在は悪，悪より善の勝っている存在は善ということになる。だが，何時の世にあっても，被造物は霊的なものより物質的なものを好み，自ら進んでそれを選ぶものである。悪はますます重さを加えて行った。

L'âme tomba, des maux multipliant la somme,
Dans la brute, dans l'arbre, et même, au-dessous d'eux,
Dans la caillou pensif, cet aveugle hidenx.
Êtres vils qu'à regret les anges énumèrent,
Et de tous ces amas des globes se formèrent,
Et derrière ces blocs naquit la sombre nuit.
Le mal, c'est la matière. Arbre noir, fatal fruit.(11)

（魂は失墜した，　もろもろの悪は数を増し，　獣に，樹木に，さらにくだって，醜い盲，だまって考える石に及んだ。天使らがうらめしく数えあげるもろもろの卑しい被造者，　その堆積のすべてから，いくつもの球体が形づくられ，それらの魂の背後に，闇の夜が生れた。悪はすなわち物質。暗黒の木，宿命の果実。）「井上究一郎氏訳」

この世に於ける存在物は，すべてそれらの持つ悪の意識や物質の重量に従って厖大な階級に分れることになった。石から植物へ，植物から動物へ，動物から人間へ，人間から天使へ，天使から神へと次第に位は上がって行くのである。この階級は，恐怖と滅亡の世界，怨霊や罪悪のひしめく深淵で始まる。そこは地獄の底と呼ばれ，悪魔たちは鎖につながれ，悪は「生きている恐るべき髑を吐き出し(12)」，七頭蛇は星のうろこをつけた体をのたうちまわし，「禍の波の中に呑み込まれている。」そこには，「恐るべき黒い太陽があり，夜が光を放射している。(13)」この世界の王はサタンである。これとは逆に，階級の最上位を占めるのは，悲惨も災禍もない歓喜の世界，光の深淵である。ここは天国と呼ばれ，「光から生ま

れた天使達(14)」は光輝の翼に乗って壮麗な天空を天翔け，善なる魂はその額を至高者の輝く足ゆびに触れ，「すべてが歌，香，炎，まぶしさ(15)」である。そこには，目眩く太陽があって，永遠の光を放っている。この世界の王は神である。

ここで，神とサタンとの関係を考察しておこう。

『サタンの終り』によれば，サタンはもともと「光り輝く額と，空や生や人間を黄金色に彩る火のような瞳を持った大天使」であったが，神に反逆したため天使の座から降ろされ，天界から追放された反逆児である。彼は神を呪い，人間を嫉妬し，復讐の鬼と化す。彼の悪行はその極限に達する。

Je hais! — Oui, je vous hais, tas humain, foule blême,
Parce que vous l'aimez, parce que Dieu vous aime;
Je défigurerai la face universelle.
Serpent, je secouerai dans l'ombre ma crécelle.
J'inventerai des dieux, Moloch, Vishnou, Baal.
Je prendrai le réel pour briser l'ideal,
Les pierres des édens pour bâtir les sodomes.
J'enlaidirai l'amour dans le coeur de la femme.
Je suis le bourreau sombre, et j'exécute Dieu.(16)

（大意。　おれは憎む！　そう，おれは憎むのだ，人間の群を，蒼ざめた群集を，おまえたちが神を愛しているから，神がおまえたちを愛しているから。おれは宇宙の様相を変えるだろう。蛇よ，おれは暗闇の中でがらがらを振るだろう。おれはモクロ，ヴィシュヌ，バアルの神々を作り出そう。おれは現実を捉えて理想をこわし，エデンの石を手に入れソドムを建てよう。女性の心のなかにある愛を歪めてしまおう。おれは陰険な死刑執行人，だから，神に死刑を執行するのだ。）

だが，悪の権化である筈のサタンは，やがて悔悟の念に囚われ，苦悶状態に陥る。彼は苦悩と懊悩に取り憑かれ，死物狂の苦闘を続けるが，これは，彼が神を愛している証拠なのである。サタンは，「もし神を愛していなかったら，おれは苦しまなかっただろうに(17)」「もし幸せだったら，おれは呪うようなことはしなかっただろうに(18)」と嘆息する。

サタンには娘が二人いるが，一人は，大天使が，つまりサタンが天界から墜落する際，「まっくらな深淵の縁」に落した一枚の羽根に神の意思が加わってできた娘である。つまり「地獄と天国の娘」である。彼女はリベルラ「自由」と名付けられ，神の使者として悪の世界に下降し，父であるサタンを苦しみから解放するが，その下降の途中，「ゴルゴタの天辺に立った十字架のように両手を広げ，行手を遮る(19)」者に出会う。その邪魔者はリベルテの妹イジス．リリトである。つまり，「アダムが蛮の前に苦味を，天

空の接吻(くちづけ)の前に深淵の接吻を味わうように，[20]」サタンが暗闇を用いて作った彼のもう一人の娘である。彼女は「宿命」を象徴するヴェールをかぶり，イヴの出現以前には，アダムと褥をともにするという悪そのものである。姉のリベルテが善の原動力であるのに反し，妹のイジスは悪の原動力であり，その力は物凄く，一旦捉えたら最後，どんなことが起ろうとも決して放さなかった。そのため，すべてが崩壊し，堕落し，「人間は人間の血の中で体を洗う[21]」ような世界が訪れることになった。希望を失い，絶望に陥った人々は，偶像崇拝へと走り，「幻影，イジス．リリトを崇拝していた[22]。」

この迷信的風習である偶像崇拝は，ユゴーが最も忌避する問題であった。ユゴーは，人間に悪をもたらした最も大きな原因が，この偶像崇拝だというのである。つまり，人間の神に対する誤った思考が隅像崇拝を産み出した訳であるが，無知である人間は，それを通して神聖な光を自分の内部で故意に暗いものとし，物質を造り出したと言うのである。

さて，生き血を吸い，屍肉を喰う悪の全き行動者，イジスは，父であるサタンが善的要素を表わし始めるのを知ると，怒りに狂い，父親に向って憎悪の叫びを罵り散らす。

かくて，墜落した天使サタンと，幻影でしかないイジスとの間に完全なる対立関係が生じるのである。

激怒した悪神イジスが善の存在を許す筈がなかった。仮へ父親であろうと，また，異母姉であろうと，悪の世界に善をもたらすような存在は許せないのだ。イジスは姉のリベルテを滅ぼさなければならなかった。だが，所詮彼女は暗闇から作られた幻影でしかなく，虚無なる存在でしかないのだから，神の光の協力を得てできた天使リベルテに適う筈がない。

à mesure
Que l'astre grandissait, la larve décroissait;
L'ardent grossissement de l'étoile poussait
Lilith—Isis vers l'ombre,.....
Les rayons dévoraient l'affreux linceul flottant;
L'étoile.....
Fondait le monstre ainsi qu'un glaçon dans la braise.[23]

（大意。　星が大きくなるにつれて，怨霊は小さくなっていった。星の激しい増大は，リリト．イジスを暗闇の方へ押し返していた.....光線は，だぶついた恐るべき屍衣をむさぼり喰っていた。
．．星は.....怪物を溶かしていた，熾り火に落ちた氷のように。）

憎悪と復讐に心を燃やす反面，悔悟と神への愛に懊悩するサタンを目前にして，彼の娘リベルテは，この憐れな悪魔を優しい哀歌をもって，静かに宥め始める。

O toi! je viens. Je pleure. .....
Je viens te demander une grâce, Ô maudit!
..... Je suis ta fille. .....
Ne te courrouce point, père, puisque je t'aime!
Le blessé ne hait pas la main qui le soutient;
..... Tu croyais que la vengeance est douce;
Elle est amère. Hélas! le crime est châtiment.
La croissance du mal augmente ton tourment:
..... Je viens gémir, luire, éclairer;
Ôter du moins le poids de la terrestre chaîne,
Laisse-moi mettre l'homme en liberté. Permets
Que je tende la main à l'univers qui sombre.
Laisse-moi renverser la montagne de l'ombre;
Laisse-moi jeter bas l'infâme tour du mal!(24)

（大意。おゝ父よ！　わたしはやってきました。わたしは涙を流しています。おゝ呪われた人よ！　わたしはあなたにお許しを乞いにやって来たのです。わたしはあなたの娘です。父よ，怒ってはいけません，わたしはあなたを愛しているのですから！　負傷者は，自分を支えている手を憎みはしません。あなたは復讐が甘いと思っておりました。それは苦いのです。あゝ！　罪は懲罰なのです。悪の成長は，あなたの苦しみを殖やすのです。わたしは伸吟し，輝き，光を放ちにやって来たのです。ともかく，地上の鎖からあなたの重さを取り除きにやってきたのです。わたしに，人間を解放させて下さい。没落する世界に手を差しのべるのをお許し下さい。暗闇の山を打倒させてください。悪の穢れた塔を破壊させて下さい。）

娘の励精するこの言葉を聞いたサタンの顔は，まるで「混沌たる戦場」のような状態になるが，これはサタンの体内で善と悪とが奮戦していることを暗示するものである。

サタンは，やがて悪より善を選び，娘の意向に同意を示すが，彼の発する言葉は，唯一言 ≪ Va!≫（行け）である。この命令口調の≪Va!≫は，「進歩に向って真っ直ぐ進め(25)」を意味し，ユーゴーの終生を貫く「人類進歩」の哲学に直接結びつくものであり，ユゴーの「進歩」の理論には必要不可欠な言葉である。

進歩と理想の光明を追求しようとするサタンのこの気持は，≪Va!≫という言葉を通して，始めて娘の気持と一致し，完全なる結合を見るのであるが，この結合こそ，まさに『サタンの終り』の結論であり，神とサタンとの和解なのである。すなわち，サタンとその娘リベルテが別々に離れ，少しも結合の気配を示そうとしない限り，この世は暗憺たる滅亡の世界と化すが，両者が互に接近し，完全に一致する時，サ

タンは神から赦され，以前のリュシフェールに戻り，悪の根源は絶滅して，この世は黄金の楽園となる，と言うのである。

この世が少しでも善の方向に進むとすれば，それは神の娘であり，サタンの娘である天使リベルテが存在しているからに他ならないのである。

Un ange est entre nous; .....
L'homme, enchaîné par toi, par elle est délivré.
Viens; l'ange Liberté, c'est ta fille et la mienne.
Cette paternité sublime nous unit,(26)

（大意。 一人の天使が我々の間にいるのです。君（サタン）によって鎖につながれた人間は，彼女（リベルテ）によって解放されるのです。おいでなさい。天使リベルテは君の娘であり，私の娘なのです。この素晴らしい父子関係が我々を結びつけているのです。）

ところで，神の期待する世界とは一体どんなものなのだろうか。それは，神自身既に真であり，善であり，永遠の愛である以上，当然真実で，善良で，愛に充ちた世界でなければならない。神の世界は，悪でも，善悪に中立なものでもなく，善そのものでなければならない。だから，悪の要素と善の要素とでできている存在物は，悪の要素を小さくして，できれば無の状態にして，善の要素を残さなければならない訳である。善そのものの中に含まれている悪を善に変え，悪そのものの中に含まれている善だけを引き出すよう努力すべきなのだ。だが不幸なことに，というより，幸なことにと言った方が適切かもしれないが，神の創造した「不完全さ」は，神と被造物とを区別するのに必要不可欠なものであったが，被造物に自由を与える結果になったのである。この自由は，全存在物の道徳的生活に於ける本質的条件であるが，善を選ぶことも，悪を選ぶこともできた。もし善を選ぶ自由があって，悪を選ぶ自由がなければ，その自由はもはや自由でなくなってしまうからである。

人祖アダムとイヴの堕落もこの自由に基づくのである。人間は「園のすべての木の実を，自由にたべてよい。だが，善悪の知識の木の実を食べてはいけない(27)」という神の命令に従うことも，背くこともできた。つまり，人間は天国にあって，生命の木の実を食べ，平和にのびのびと暮らし，永遠の生命を得ることも自由であったし，禁断の実を食べて，神の掟を破ることも自由であった訳である。人間は，幸福で汚れを知らない楽園の生活よりも，あらゆるものを区別し，それによって苦悩し，また死ぬことを選んだのである。

人間が神の命令を拒絶し，神を無視したことはとがめられるべきことである。確かに，善悪の区別を識り，悪を体験したことは悪いことである。だが，その結果，善悪のけじめがつくようになったことは良いことではないだろうか。もし人間が神の命令に従い，楽園の生活を続けていたら，キリストの存在も名前

も知らなかったであろう。また，自己を再び神化しようという試みも行われなかった筈である。アダムとイヴが楽園から追放されたお蔭で，われわれ人間は悪を知り，その悪を最後まで徹底的に味わい，そうすることによって，今度は逆に，意識ではどうしても到達し得ない完全なる状態，つまり天国の楽園や永遠の至福に達し，真の自分を復活させ，再び至善を実現することができるようになったのである。人祖の犯した罪に関しては，現代の神学者たちもこれと同じ考え方をしているようである。このことは，人間ばかりか，地上の全存在に対しても言えることである。地上の存在物が，悪の意識や物質の重量に従って様々な階級に分れることは前にも触れたが，この階級の昇級，降級は，すべて自由の使い方によるのである。被造物には，物質的な面を伸し，極悪の世界を選ぶ自由も，霊的な面を伸し，至善の世界を選ぶ自由もあるのだから。だが，もともと神によって創造され，神の一部である被造物は，神に適った世界を作るのが当然であり，そう努力すべきなのである。

ここで，全存在物の階級に関するユゴーの哲学的思考に触れてみることにしよう。

ユゴーの哲学は，この世に存するすべてのものが生を保ち，自らを養い，成長するという観念から始まる。植物や動物は言うに及ばず，石までが生命を保ち，魂を持っているのである。

La nature est une âme, elle n'est pas de marbre.[28]」

（大意。　自然は魂であり，大理石ではない。）

また，生命や魂を持つばかりか，すべてが感性をそなえているのである。花は鋏を見たり，その音を聞いたりすると，恐怖に戦き，冬の大地は寒がり屋で，太陽で身を暖めたりするのである。だから，野にさく美しい花を摘み取り，その香を嗅いだ場合，我々はその花の苦悶を嗅いだことになるのである。

Pleurez sur l'araignée immonde, sur le ver,
La pitié fait sortir des rayons de la pierre.
..... Voyez des âmes dans les choses.
Plaignez le prisonnier, mais plaignez le verrou.[29]」

（大意。　穢らわしい蜘蛛や蛆虫のために泣いてやりなさい。憐憫は石からも光芒を発せしめる。事物の中にある魂のことも考えてやりなさい。囚人を憐みなさい。だが，閂のことも憐んでやりなさい。）

このような存在物すべてが，生や魂を保ち，感情や感性を備えているということから，今度は必然的にそれらが物を考え，その思考をそれらに適った方法で表出するということが起る。更にまた，それらは各自道徳的な責任とか義務といったものを持っているのである。例えば，ナイアガラの近くの「流れは，髪を振り乱し，その辛い責苦に堪え忍んでいる[30]」が，それは，その流れの義務であり，責任であるのだ。

これを守ることによって，この流れはそのままの状態を維持することができるのであり，うまく行けば，一歩前進した姿になることができるのである。こういった道徳的観念を堅持し，常に善行を行なっていると，「鉱物の生命は植物の生命に移り変り，植物の生命は動物の生命に変る」のである。「この最も良い例が猿である[31]。」

人間はこの階級の丁度真ん中に位置し，常に苦しんでいる。というのは，人間は生まれながらにして懲罰を受けているからである。前の世で犯した過ちを，この世で償っているのである。だがその過ちが一体どんなものなのか具体的には全く解らず，たゞ罪の意識だけが絶えず感じられるのである。そのため，人間は常に苦しみ，それを堪え忍ばなければならないのである。これは前の世から課せられた義務なのである。「人間は肉体を持っていて，これが重荷にもなり，誘惑にも[32]」なるのであるが，この物質的な誘惑に負けたり，義務を怠ったり，悪行を行ったりすると位をさげられてしまう。これも各自の罪の重さに従って降級の位が違うのである。例えば，残忍な行為で生涯を終ったローマの第二皇帝，ティベリュスは岩に，彼の寵臣，セイアヌスは自分の対抗者たちを追い払うために狡猾な策略を用いたので蛇に，旧約聖書の最初の権力者，ニムロデは嶮しい山に，紀元前四世紀の遊女，フリュネは蟇蛙に変えられてしまうのである。従って，我々人間の社会には，天使が堕落して人間になった者や，動物が救霊を得て人間になった者などが同居しているのである。これは，「動物にとっては名誉であり，天使にとっては不名誉[33]」となるのである。「罰せられた半神」と「罰を赦された怪物[34]」と人間のひしめき合っている世界，これが我々の世界なのである。

ところで，人間を始め，全存在物が特に昇給を希望した場合どうすれば良いのだろうか。勿論，平素から自分の義務や責任を忠実に果し，善行を続けることは当然であるが，更に愛と祈りとが必要なのである。愛すること，祈ること，この二つが昇級の条件なのである。

Aimez — vous! aimez — vous! car c'est la chaleur sainte,
C'est le feu du vrai jour.
Le sombre univers, froid, glacé, pesant, réclame
La sublimation de l'être par la flamme,
De l'homme par l'amour.[35]

（大意。 愛しなさい！ 愛しなさい！ それは浄い熱情であり，真の太陽の熱気であるのだから。暗く，冷たく，凍った重い世界は，求めている。情熱によって存在物が昇華するのを，愛によって人間が昇華するのを。）

こういった哲学的思考は，人類が「進歩を目的に，理想を規範として[36]」生き続けようとする限りすべてに抱かれ，すべてに保持されなければならない問題ではないだろうか。

ところで，ユゴーの理想は，地上の全存在物が自分の内部にある悪の要素を善の要素で打ち負かし，すべてが「悪から善への，不正から正義への，虚偽から真実への，夜から昼への，欲望から良心への，腐敗から生命への，獣性から義務への，地獄から天国への，虚無から神への前進[37]」となることであった。出発点は物質だが，到着点は魂となること，最初は七頭蛇だが，最後は天使になることであった。ユゴーは実生活に於ても，「いつも光明に向って人類が前進する[38]」のを支持し，その実現に生涯を懸けていた。「……前進！これが進歩の言葉です。これは芸術の叫びでもあります。ＩＴＥ（行け）……あなたは前進するのです。あなたは新しい戦慄を創造するのです。……芸術は完全化されることはありません……だが，芸術の地平線を移動し，さらに上がり，さらに遠くに行き，前進しなければなりません。詩人は唯一人で進むことはできません。人類も移動しなければならないのです。だから，人類の歩みは芸術の歩みそのものなのです。――ゆえに，「進歩」に栄えあれ。

わたしが現在苦悩し，死をも辞さぬ覚悟でおりますのは，「進歩」のためなのです。[39]」

ユゴーは，実際自分の抱く人類の無限の進歩や，理想主義的社会の建設が可能であると心底から信じていたのである。物質を征服すること，これが第一歩である。理想を実現すること，これが第二歩である。仮えそれが不可能とわかっても，絶望してはいけないのだ。「進歩は必ず目を覚す」のだから。

Espérez！ espérez！ espérez！ misérables！
Pas de deuil infini, pas de maux incurables,
Pas d'enfer éternel[40]！

（大意，望みを持て！望みを持て！望みを持て！憐れな人々よ！無限の悲しみはないのだ。不治の病気はないのだ。永遠の地獄はないのだ！）

この世には永遠の懲罰は存在せず，サタンが救されたと同じように，前世から罰せられた世界もいつかは救されるのである。「赦しは人間の義務であり，神の権利である」のだから。つまり「進歩」の極限に於ては，もはや「悪」の存在は認められず，至善の世界が訪れるのである。

最後に，神はなぜ人間を創造したのか，悪は何の役に立つのか，この二つの問題に触れ，この小論を終ることにしよう。

第一の問題は逆説的な思考方法で解決できる。もし神が被造物を創らなかったならば，また，それを不完全に創らなかったならば，神は唯一の存在となり，父としての一面きり現わすことができず，御子イエス．キリストが無限の犠牲的愛を持って，その姿を現わすようなこともなかった筈である。それどころか父なる神も存在しなかったであろう。というのも，御子がなければ，その父も存在し得ないのだから。神はたんなる天地を創造する力，楽園を支える力に過ぎなかったであろう。こうなると，「ご自分の光栄と愛とを表わし，また，人が神を知り，神を愛し，神に仕えて，永遠の幸福を得る[42]」という神の目的は全く達せられないことになる。

これと同じことが，悪の問題に関しても考えられる。もしこの世に悪がなく，善ばかりであったなら，善はもはや善ではなくなり，善悪の観念は勿論，善の意義も失われてしまう訳である。この世が災いや苦しみや罪悪のない「天上の楽園」であったたらば，人間はキリストを知らない存在であったことは無論であるが，自由のない存在，自分を表現したり，様々な創作活動をする意識を持たない存在となったであろう。知識の原理を宿すこともできず，より高い意識と，より高い知的存在に達することもできなかった訳である。従って，ユゴーは，人類進歩の道具として，特に悪と疑念の必要性を強調したのである。「疑いは人間のあらゆる仕事の基礎である……それは肉体と精神の戦いである……それはヤコブと天使との永遠の闘いである……イエスはどうしてカルヴァリオの丘で疑ったのか。なぜなら，疑いは人間精神の道具であるからだ。人間精神がもはや疑念を抱かなくなった日には，人間の魂は現身を去ってしまうであろう。そして……あなたたちの大地は耕されないままになってしまうであろう。(43)」

カトリック要理では，この世の災いや苦しみを神が取り除かなかった理由として，「それらの災いや苦しみから善を生ぜしめ，この世の苦難をとおして人をのちの世の幸福にお導きになる(44)」ためであるとしているが，これこそまさにユゴーの宗教観の本質をなすものである。「苦しむ魂は崇高な状態にあるのだ(45)」と強調しているように，ユゴーは，苦しむことこそ人間をさらに向上させ，神に一歩近づける手段なのだと考えている。人間は身の周りの様々な障害物はできるだけ早く乗り越え，苦しみを積極的に甘受して，そこに何らかの意味を見出すよう努めなければならない。その意味が解るようになれば，苦しみは次第に軽くなり，ついには，その苦しみを通して，一条の光明を認めることができる，と言うのである。その光明を見出すためには，人間は苦しまなければならないのだ。ジャン・ヴァルジャンやサタンが，あの恐るべき苦しみを何度も体験し，死にもの狂いの戦いを続けたのは，「翼ある魂の世界に達し，その額を至高者の輝く足ゆびに触れ(46)」させるためであった。また，ジリアットが，海と暗夜に取り囲まれ，様々な苦痛，苦悩にさいなまされても，それを耐え忍ぶことができたのは，内心に「進め！」という希望の光があったからである。「うわべは地獄に落ちること，それが実際は，地獄から抜けだすことになるのだ(47)。」

結局，この世の悪は，善の存在のためになくてはならないものであるし，悪に反対するものとして善を作り出す力でもあるのだ。つまり，悪は，善が善となるための道具であり，「人類進歩」には必要不可欠なものなのである。悪の可能性こそ，まさに善の条件なのである。

註

(1) 『アヴェスター』筑摩書房　330頁

(2) 同書　346頁

(3) DENIS SAURAT : La Religion esotérique de VICTOR HUGO (La Colombe, 1948) p21

(4) VICTOR HUGO : Les Contemplations (Garnier, 1962) p326

(5) (6) VICTOR HUGO : La Légende des Siècles (Garnier, 1962) p19 p21

(7) 註 (4)　(8) 註 (3) 25頁　(9)『聖書』ドン・ボスコ社　6頁

(10) 註 (5) 303頁　(11) (12) (13) (14) (15)　註(4) p326〜329

(16) VICTOR HUGO : La Fin de Satin (La Pleiade, 1950) p900〜903

(17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24)　註(16) 899頁〜930頁

(25) VICTOR HUGO : Dieu (La Pleiade, 1950)

(26) 註(16) 940頁　(27) 註(9) 7頁　(28) 註(5) 534頁

(29) 註(4) 341頁　(30) 註(5) 469頁

(31) Carnets dans OEUVRES COMPLÈTES de VICTOR HUGO

(Le Club Francais du Livre, 1969) Tome VIII p1114

(32) VICTOR HUGO : Les Misēracles I (Garnicr, 1966) p21

(33) (34) (35) 註(4) 335頁 344頁

(36) 註 (32) 621頁

(37) Les Misērables II p489

(38) 註 (32) p60

(39) La Correspondance à Charles Bandelaire Le 6 octobr 1859

dans OEUVRES COMPLÈTES Tome X p1327

(40) 註(4) 343頁

(41) Les Tables parlantes dans OEUVRES COMPLÈTES Tome IX p1511

(42)『カトリック要理』中央出版社　17頁

(43) 註 (41) p1282〜1.298

(44) 註 (42) 14頁　(45) 註(37) 53頁　(46) 註(4) 329頁

(47) 註 (32) 278頁

(48) その他の参考文献として

DENIS SAURAT : La Religion de Victor Hugo (Hachette, 1929)

Jacques Heugel : Essai sur la philosophie de Victor Hugo

(Calmann—Levy, 1930)

MAURICE LEVAILLANT : La crise mystique de Victor Hugo

(Josē corti, 1954)

CHARLES LECOEVR : La Pensēe religieuse de Victor Hugo

(Bordas, 1951)

Lioukin — Ling : Étude sur L'art de Victor Hugo(Presses
(Presses Modernes, 1939)
FERNAND GREGH : L'OEUVR de Victor Hugo (Flammarion, 1933)
PAUL BERRET : La Légende des Siècles de Victor Hugo
(Mellottee, 1945)
ALBERT PY : Les Mythes Grecs dans La Poésie de Victor Hugo
(Droz, 1963)
B.ヘーリンク『キリストの掟』渡辺，稲垣，田代訳　中央出版社
『カトリック大辞典』　富山房